



いやな言葉

Nasty Word Usage

武田 信生

Nobuo Takeda

EICA 名誉会員・京都大学名誉教授

歌は世に連れ、世は歌に連れ（歌は、その時代のありさまや傾向の影響を受けやすく、また、その時代のありさまや傾向も、歌の影響を受けやすいということ）というが、言葉も時代を映すものであり、世の移り変わりにしたがって変化する。したがって、個々の言葉の意味は時代によって変化するし、また使われる場面も必然的に変化する。そのことはよくよく分かっているつもりなのであるが、だんだんと歳をとってくると自分が若々しく生きた時代の使い方からあまりにもかけ離れてくると、焦りにも似たいらだちを覚えてしまうことがある。

筆者にとって、最も強く不快感を掻き立てる代表的な言葉は、TVのグルメ番組などで頻発される「ヤバイ」である。「美味しくってやめられなくなる、やみつきになる」ということを強く表現するために使われるようになったのであろうが、「危険であるの意の俗語、隠語」と辞書に説明されているように、そもそも「ヤバイ」は品のない言葉であるために、TVのような公共の場で発せられると、美味しさよりもむしろへどを催すような気分が脳をよぎるために不快を感じるのではないかと推察している。

ふと、「いやな言葉」などと銘打って変なこだわりで一文をものにしようとしているのは自分だけであろうか、と気になりインターネットでそれらしき検索を試してみる。あるある、たくさんの事柄がひっかかってくる。大へん古い時代からこの問題は論じられてきたみたい。そして、気にしない、気にしない派から、けしからん、大いに問題派まで、互いがゆずらないくらいの問題であるらしい。「今の若いもんは……」型の問題に対して、どんな時代にも楽観派と悲観派が対立を繰り返してきたらしいのである。同じようなことをここで展開しても仕方がないので、現代においてもご多分に漏れず論じられている視点からは少し離れて、世は歌につれ、つまり、言葉の方が世のあり方に影響を与える点について考えてみたい。これは「ヤバイ」以上に深刻かつ本質的な問題であり、心配の種でもある。かねて気になっていた言葉の使い方を整理して、言葉の方が時代のあり方に影響を与えそうであると考え二点を整理してみると次のようになった。

その一。[無責任化]；「……させていただく」というふうに、誰かの許可を得てさせてもらっているわ

けでもないのに、盛んにこのいい方が使われる。「私、鉢山が総理を務めさせていただいておりました頃……」などといわれても、こっちとしては、「手前が他を振り落してでも総理になりたくってなったんだろうがナ。ちゃんと責任を果たしな。責任をとる気がないから、誰かに無理やり頼まれて総理になったのだ」という印象を与えるために、そのようないい方をするんだろうが……。」といたくなるのは筆者だけか。

その二。[give & take 化]；「元気をもらった」、「感動をいただいた」などと、こころの動きみたいな性質の事を、まるで物をもらったような表現に変えるいい方——擬人化ならぬ擬物化といえるような言葉使いが増えて来たように思える。一方、プロ野球選手のインタビューに見られるように「……しますので、応援よろしくお願いします」といわれると、向こうから何か取引を求められているような嫌な思いがするし、冬季五輪で良い成績を収められなかった選手が、「いままでに多くの方々からご支援・ご協力をいただきましたのに……」などと挨拶するのを観ると、思わず「そんなに気を遣わないで、もっとのびのび競技したらいいんじゃないの」といいたくもなってしまう。お礼や感動や応援といった事はお金や物の遣り取り (give & take) ではなく、こころの動きであるということをもっと大事にしたいものである。言葉は「反応」を呼び起こす力である。応援や支援が欲しくてプレイしているのではないだろうし、メダルをもらえるから応援するわけでもあるまい。感動するのは感動する人の反応であり、物の遣り取りの結果ではない。

無責任化と“give & take”のあり方は、どす黒い血、温かい体温、汗の臭いが充満するこの現実世界を、無味乾燥なサイバー世界へと昇華してしまう可能性（効果）を秘めていないだろうか。無人戦闘機は罪のない市井の人を襲撃しても、次の出撃の時に氣勢が削られるということはないだろう。空調の効いたコントロール室でミサイルの発射操作をする非戦闘員の戦闘員はベトナム帰還兵が苦しんだような精神疾患を経験することはないかも知れない。

言葉は魔の力を秘めている。時代のありさまや傾向の影響を受けやすいが、同時に時代のあり方や傾向も言葉の影響を受けやすいのではないかと心配である。